三宅和久さんが語る

「救援」「へき地」にやりがい見つける

岡山大学の医学部時代から、青年海外協力隊や山間部、離島といったへき地医療に関心がありました。医者は都会にばかり集まっていて、田舎に行けば、今でも医者が少なくて困っている。この分野なら役に立つことができるのでは、と思っていました。

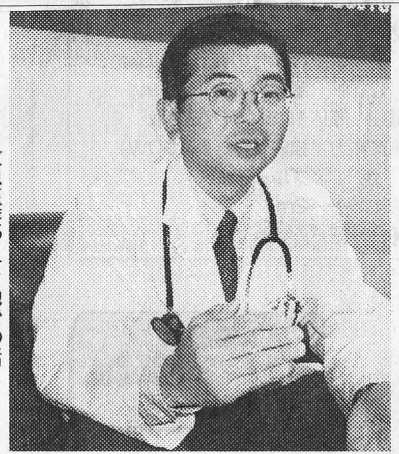
専門は内科と小児科ですが、へき地医療は、「何でも屋」でなければ通用しません。一九八九年に卒業した後は、京都市内の救急病院に就職しました。当直の時に患者さんが運ばれてくれば、どんな治療にも立ち会わなければならない。もちろん、手術などは専門医が担当しますが、簡単な縫合などはできないと、救急病院の医者としては使いものになりません。今、その時の経験が海外での緊急医療で役立っています。

二年後、学生時代の友人から「イランでクルド難民の医療支援を手伝ってくれないか」と誘われ、当時、外来患者を持っていなかった身軽さから引き受けたのが、アジア医師連絡協議会（AMDA）の活動をするきっかけでした。

その後、「本格的にやってみないか」と、AMDA代表の菅波茂さんから請われ、九三年に岡山に戻ってきました。ここでは、病院の内科医として外来を診ながら、毎週月曜日には、約四十キロ離れた加茂川町で、週一回だけ開く診療所の当直をし、翌日は、寝たきりのお年寄りへの往診を続けています。

年に一、二度、ボランティアで海外に飛び出し、国内では、無医村地区の医療に力を入れています。学生時代からの希望でしたが、専門医として、大学病院などでバリバリやっている友人をみると、正直、自分の医療技術に焦ったりもします。でも、落ち込んでみても仕方がない。自分の体力と一人暮らしが続く限り、緊急医療とへき地での診療が、自分の天職だと思っています。

（つづく）



救急医療やへき地での活動に思いを語る三宅医師

● AMDAインド地震救援団長